

## 女性殺害事件

大ローマ布教所長  
山口 英雄 Hideo Yamaguchi

## 女性殺害事件相次ぐ

昨年から今年にかけて、離婚、または別居した男性が、元妻や元同棲相手を殺すという事件が多発して、大きな社会問題となっている。特に、イタリアや中南米においてこのような事件が頻繁に報道されている。2018年1月に南米チリとペルーを司牧の旅として廻った法王フランチェスコは、それらの事件に関連して、初めて声明を發した。

「聖母マリアへの愛は、一般女性に対して、また我々の市民生活の砦となる母や祖母に対して、真の理解と尊敬の念を認識することを助けるだろう。我々の世界に発生する切り傷、つまり女性殺害事件が無くなるよう戦うことを皆に促したい。」法王はさらに続ける。「我々は暴力を正当化できないし、自然の流れのものとは理解し難い。女性に対する暴力を絶滅しなければならない。我々の社会にあって、女性が主役になることを受け入れない男性中心文化を支持することは出来ない。」

教会の教えの中で、男性と女性の役割に差があるように見えるが、イエスの示した実践過程をカソリックは推進している。社会的権利の面からみれば、男性も女性も平等だ。そこには何の差別もない。

## 根深い性的児童虐待問題

今回の法王のチリ、ペルーへの司牧の旅は7日間の日程だったが、その間に法王は10回飛行機に乗り、その移動距離は実に3万キロに及んだ。その司牧の旅も終わり、ローマへの帰途、機内で恒例の記者会見が行われた。その席上で大きな話題になったのが「性的児童虐待問題」であった。法王は緊張気味であったし、顔には疲労の色合が映し出されていた。「私は“性的児童虐待事件”の被害者に許しを請いたい。その事件の証拠があったら、提出してくれと頼んだが、これは私の使った言葉が適切ではなかったと反省している。ここ数年間、何人かの被害者はジュアン・バロス神父を配置換えするよう求めている。ジュアン・バロス神父は、児童への性的虐待にかかわったカラディマ枢機卿の事例を隠蔽したというものだ。しかし、その証拠はない。」そこで、「被害者の声よりもバロス神父の声を信じるのか。」との質問が飛んだ。それに対して次のように答えた。「いや、そうではない。バロスに関しては私が個人的に調べた。罪状は認められなかった。バロスはもう20年も司教の役をこなしている。その間に2回辞職を願い出ている。私は直接本人に会い、話し合ったがおかしいところはなかった。私は彼の無実を信じている。」

2月19日、チリにおける「性的児童虐待問題」をさらに詳しく調べるために、法王の特命で、マルタの大司教チャールズ・シクルーナが派遣された。法王はヴァチカンにいる約120名の枢機卿の中からすぐに議決できる9人を選んで「C9」委員会を立ち上げた。シクルーナ大司教もその一人だ。氏はチリのサンティアゴに赴く前に、アメリカ、マンハッタンにある司教区教会に、性的児童虐待事件の犯人カラディマ枢機卿の被害者の一人ホアン・カルロス・クルスに会い、4時間話し合った。それによると、バロス司教も事件に関係していて、その事件を揉み消しているという。シクルーナは、このあとサンティアゴで被害者のジェームス・ハミルトン、ホセ・アンドレス・ムリヨに会い、話を聞くことになっている。

「性的児童虐待事件」は世界中に広がっている。報告されているのは、事件のほんの一部に違いない。その事件の膿を出すために、法王は全力を尽くしている。このような事件の調査の

成り行きと解決方法に宗教界のみならず、世界が注目している。こうした事件は、主なものでは2001年のアメリカのボストンの枢機卿だったバーナード・ロー（今年2月に死亡）が当事者として責任を取って辞任した事件をはじめ、ドイツのラティスボーナ、今回のチリのサンティアゴと相次いでいる。

## 法王中国訪問に意欲的

中国は、ヴァチカンが中国を敵対視していないことが確認されたので、ヴァチカンとの外交関係を結ぼうとしている。中国におけるカソリックの現地人信者は1,600万人を数える。彼らの信仰と日常の活動の自由を保証しようとするものである。ヴァチカンと台湾が外交関係を維持していることが障害となっているが、すでにヴァチカンと中国との話し合いは始まっている。3月末には中国の代表団がヴァチカンを訪れ、カソリックの司教任命権がヴァチカン側にあることを全面的に肯定しようとしている。ヴァチカンと台湾の外交関係が中国の望むような形で終結すれば、法王の中国行きが実現するだろう。

## 法王が異端だって?!

チリとペルーの司牧の旅を続けた法王は1月16日チリのイエズス会の会員と、19日にはペルーのイエズス会の同志と懇談した。その中の主な問答を記したい。

(問) 法王になって、今までに一番大きな喜びは何か。

(答) 法王になるとは予期もしていなかった。一番大きな喜びは、平和が私を導いてくれていることだ。これは主の贈り物だ。私から平和を奪わないでくれ。一番困るのは陰口だ。それは私を悲しくさせる。

(問) どんな抵抗に出会い、それにどのように対処したか。

(答) 大事なことは、それを良く見定めることだ。真の抵抗があれば非常に残念なことだ。改革をしようとするれば、反対があるのは当然だと人は言う。第二ヴァチカン公会議以降、その反対はずっと続いている。精神を健全に保つためには、その噂を気にしないことだ。その噂が流れ出た所も、その噂の張本人もグループも分かっている。私を異端という者もいる。改革のためには前進しかない。皆が納得するためには、根気よく対話を続けるしかない。それでも罅があかなければ、彼らのために祈るだけだ。

(問) イエズス会の同志に対して、多くの者が年をとり、また後に続く若者が少なくなっている時に、何を告げようとしているのか。

(答) 失望することは、堅心を下に引き摺り下ろすことだ。どんな環境の中でも、神の思いを知ることだ。日本から中国に渡ったフランシスコ・ザビエルから学べるのだ。彼は神のなさることに全面的に応えた。神が望まなければ、それを実行しなかった。中国奥地までの伝道を夢見ていたが、全面的にうけられてもらえなかった。彼はそれも神の思いと知り、それを喜び受け入れていたのだ。

(問) 今、性的スキャンダルのニュースが溢れているが、どう対処すべきか。

(答) 教会が被った一番大きな苦痛だ。このことは我々を恥のどん底に突き落とした。しかし、恥は、イエズス会の創始者イグナツィオ・ロヨラによれば、恩寵でもある。そこから、真に教会を愛することを学ぶのだ。性的迫害は一般的に70%が家庭で、知人の間で起きている。続いて体育館、プールだ。カソリック神父によるものは、僅か1.6%なのだ。数は少ないが我々の仲間がかかわっていることに我々は脅威を感じる。